

近世科学思想下
岩波書店(1971)
PP223-246

葉
徴(吉益東洞)

大塚敬節校注

高橋至時より間重高へ

二二二

れない。
越中の太仲 越中城端(註)の天文
学者西村太冲(支考)「支考」のこと。
↓補

賦立 役立。

致し人 曆学を研究する人。
は 底本「其」。

愛 底本では欠字。第七号書簡等の
用例によって仮に「愛」の字を補っ
た。

御子息様 間清市郎重威(のち重新
と改める。「支考」「支考」を指す。こ
の時十五歳、松岡能一について数学
を勉強していた。

此外、別紙に認候外、期二重便二候。小拙兎角分あしく、時々引籠り申候。夫故、書状
も認候事、一日くくと延引相成候。御不沙汰失礼、御用捨可被下候。此節、甚寒気強相
成候。折角御自(愛*)被成候様、奉存候。草々。以上。

十一月十日

高橋作左衛門

間五郎兵衛様

猶以、御子息様、御算術益御出精被成候義と、奉存候。乍末筆、各様宜御伝声、奉
頼上二候。

書 此では五経の一である尚書(書經)をさす。この文は尚書説命上に見える。

瞑眩 薬をのんだために起る副作用。↓補

周官 周公旦の撰と称せられる周礼に同じ。經書の一。この文は周礼天官に見える。

政令 政治上の法令。

毒藥 現代の医学で云う毒藥のことではな。作用のほげしい薬のこと。↓補

本草 薬物の形状、産地、効能などをのべた書物で、現代に伝わる最古のものは後漢の時代に作られたと推定せられる神農本草である。↓補

扁鵲 戦国時代の名医。姓は秦、名は越人。史記扁鵲倉公列伝にその伝が見える。ただし、「扁鵲の法」は「仲景の法」とした方が適切である。

↓補

量の多少 薬方(処方)の中

の薬の分量の多い少ないをいう。

參互 照らし合わせて考える。

微 確信。あかし。しるし。

疾医 病気の治療を本分とする医師。吉益東洞は疾医をもつて任じていた。↓補

養精の 精力をますことを研究するものは食医で、飲食物の有毒のものや無毒のもの

を辨別することをいふ。食医 飲食を以て、病氣を治す。治瘵することを本分とする医師で、食医は王の六食・六飲・六膳・百毒・百薬・八珍の齊を和するを掌る(周礼天官)。

方 方には方技即ち医術をさすこともあるが、ここでは薬方(処方)のことをさす。規矩準繩 治療の規準。原文「其方也規矩準繩」の也は非の誤りとみて、訂して訓む。古訓 古い時代からのおしえ。材に率へば 適所に適材を用うれば功があるが、それをたがえる功がない。生を養ふ 生のちを養うには、飲食物は自分の好惡に随って選択してよいが、病氣の治療に用いる薬は好惡を云ってはならない。

詩 詩經。この句は詩經の鴈風(こ)の詩句。柯は斧の柄のこと、斧の柄を作るには、自分の持つてゐる斧の寸法に合うように木を切ればよく、事物の標準は遠くにはなくて近くにあることの比喩。陰陽五行 東洞は医学における陰陽五行説を無用の空論であるとして斥けた。↓補

明和八年 一七七一年。

藥徴自序

藥徴自序

書に曰く、若し薬、瞑眩せずんば厥の疾瘵えずと。周官に曰く、醫師は医の政令を掌り、毒薬を聚めて医事に共すと。是れに由つて之れを観るに、薬は毒なり。しかして病も毒なり。薬、毒にして病の毒を攻む。瞑眩する所以のものなり。しかして本草を考ふるに、有毒のものあり、無毒のものあり、養をなすもの之れあり、養はざるもの之れあり。是において人大いに惑ふ。世遠く人涙び経毀る。之れを正さんと欲すと雖も、由なきのみ。今の頼むところは、天地人のみ。夫れ天地あれば則ち万物あり。万物あれば則ち毒の能あるなり。人あれば則ち病むとしからざる者あり。是れ古今の同じきところなり。その同じきところに従つて、その異なるところを正す、孰か正すべからざらんや。扁鵲の法、以つてその方を試みるに、薬の瞑眩するや、厥の疾乃ち瘳ゆ。その養ふと養はざるとの若きは、本草の云。終にその驗なし。依に扁鵲の法に従事し、以つてその方を試す。是を以つて、その生を養ふ者は、その好惡するところに随ふ。その疾を攻むる者は、その好惡するところを避けず。故に食医の道はその精を養ふを主るなり。故に有毒、無毒を撰して、その好惡するところに随ふなり。疾医の道はその疾を攻むるを主る。故に薬は皆毒なれども、その好惡するところを避けざるなり。しかるに医をなす者之れを弁ぜず、混じて一となす。疾医の道の絶ゆる所以なり。夫れ古今異ならざるものは、天地人なり。古今異なるものは、論の説なり。その異ならざるを以つて、以つてその異なるを正す。異ならざるは則ち異ならず、異なるは則ち異なりとするなり。譬へば人君の人を用ふるが如し。材に率へば則ち功あり、材に違へば則ち功なし。一物にして功を異にすることなきも、用異なれば則ち功異なり。生を養ふに用ふるか。疾を攻むるに用ふるか。生を養ふにはその好惡するところに随ふ。疾を攻むるにはその好惡するところを避けず。その法を知らずんば、いづくんぞその正を得んや。その法すでに建ちて、しかるのちその異なるを以つて、以つてその異なるを正す。異なら

みること茲に四十年。量の多少を以つて、その主治するところを知るなり。病の在るところを視て、その旁治するところを知るなり。參互して之れを考へ、以つてその徴を知る。是において始の惑ふところは、察然として明らかなり。凡そ疾を攻むるの具は、則ち薬は皆毒にして、疾医の司るところなり。養精の備は、則ち毒あると毒なきとを弁じ、しかして食医の職なり。食は常なり。疾は変なり。吾が党の小子、常と変と、混じて一となすべからず。しかるに本草は混じて之れを一にす。乃ち取るべからざる所以なり。取るべからずんば、則ちその方は規矩準繩にあらず。是の故に、扁鵲の法、以つてその方の功を試み、しかしてその薬の主治するところを審にするなり。次にその考の徴を挙げ、以つてその主治するところを實にするなり。之れに次ぐに方の徴なきものを以つてし、參互して之れを考ふ。之れに次ぐに古今その薬功を誤まるものを以つてし、古訓を引きて之れを弁す。次にその品物を挙げて以つて真偽を弁す。名づけて藥徴と曰ふなり。之れを猶しくするに一物なり。その用を異にすれば則ちその功を異に

ざるは則ち異ならず。異なるは則ち異なりとするなり。詩に曰く、柯を伐り柯を伐る、その則違からずと。是れの謂なり。蓋し今の医たるものの薬を論ずるや、陰陽五行を以つてす。疾医の薬を論ずるや、唯その功に在るのみ。故に異ならざるは則ち異ならず、異なるは則ち異なりとするなり。然らば則ち疾を治するは之れを如何せん。攻むるにあらずんば克たず。生を養ふは之れを如何せん。性にあらずんば得ず。吾が党の小子、論の説に眩じて、以つてその功実を失ふことなかれと云爾ふ。

明和八年中秋之日

大日本芸陽 吉益為則題す

明和八年 一七七一年。

石膏 天然の含水硫酸カルシウム。

煩渴 たえがたい口渴。言語 うわごと。熱にうかされて、わけのわからない言葉を発すること。

煩躁 もたえ苦しんで、手足をさわがしく動かすこと。

身熱 からだにばかばかと熱感をおぼえること。

考徴 証拠になるしるしを挙げて考定すること。

白虎湯証 白虎湯を応用する場合の目標となる病証。証については解説・補注「証に中る」参照。

遺尿 自らおぼえずに尿のもれること。

一斤 薬方集「薬用量について」参照。薬用量については以下同じ。

自汗 発汗剤のためではなく自然に汗の出ること。

大熱なし からだの表面に熱のないこと。大熱は体表の熱をいう。高熱のことではない。

外伝 何を指すかはっきりしない。南涯本草徴では「互考」となっている。

類聚方 吉益東洞の著で、傷寒論と金匱(心)要略中の薬方を類をもつて整理し、その使用法を指示したものである。

互考 互いに考察するの意で、ここでは確徴をつかみがたい条文をあげて考証している。傷寒論 傷寒卒病論ともよばれ、後漢末の張仲景の著と称せられている。補 傷寒 いまの腸チブス及びこれに類する急性の熱病。脈浮 体表に病邪のある時にみられる脈で、浮んでふれる。補 表証 身体の表面にあらわれる症状、例えば悪寒・発熱。補 千金方 備急千金要方に同じ。唐代の孫思邈(はんに)の著。弁誤 誤まり伝えられた部分を弁駁する。

名医別録 梁の陶弘景の著。大寒・寒に寒・熱・温・涼・平の性質があり、石膏は大寒であるという。補 仲景 張仲景。名は機、仲景は字。後漢末に長沙の太守であった。傷寒論を著したと伝えられる。補 湯家 平素口渴を訴える人。大渴引飲 ひどく口渴を訴える。

薬徴卷之上目次

石膏、滑石、芒消、甘草、人参、桔梗、朮、白頭翁、黄香

薬徴卷之上目次終

薬 徴卷之上

東洞吉益先生著

安芸 田中殖卿玄蕃

門人 石見 中村貞治子亭 同校

平安 加藤白圭子復

石膏 煩渴を主治するなり。旁ら言語・煩躁・身熱を治す。考徴

白虎湯証に曰く、譫語・遺尿。

白虎加人参湯証に曰く、大煩渴。

白虎加桂枝湯証に曰く、身に寒なく但熱す。

以上三方、石膏皆一斤。

越婢湯証に曰く、渴せず、続いて自汗出で、大熱なし。渴せずは、全く渴せざるの謂にあらず。大熱なしは、全く大熱なしの謂にあらず。説は外伝の中に在り。

麻黄杏仁甘草石膏湯は証具らざるなり。説は類聚方に在り。

以上三方、石膏皆一斤なり。木防已湯の石膏は或は三枚となし或は十二枚となし、その分量、得て知りがたし。今、傍例に従つて、以つて雞子大となすなり。

右此の諸方を歴観するに、石膏の煩渴を主治するや明らかなり。凡そ病んで、煩躁する者、身熱の者、譫語の者、及び発狂の者、歯痛の者、頭痛の者、咽痛の者、その煩渴の証あるや、石膏を得て、その効覈らかなり。

互考 傷寒論に曰く、傷寒、脈浮、発熱、汗なく、その表解せざる者には、白虎湯を与ふべからず。渴して水を飲まんと欲し、表証なき者は、白虎加人参湯之れを主る。為則按するに、上には白虎湯を与ふべからずと云ひ、下には白虎加人参湯之れを主ると云ふ。上下恐らくは錯誤あらん。是において諸を干

名医別録に、石膏の性を大寒と言ふ。自後医者之れを怖れ、遂に置いて用ひざるに至る。仲景氏白虎湯の証を挙げて曰く、大熱なしと。越婢湯の証にも亦云ふ。しかして三方は石膏を主用す。然れば則ち仲景氏の用薬は、その性の寒熱を以つてせざるや、以つて見るべきのみ。余や篤く信じて古を好む。是においてか、湯家にして熱なき者のために、投ずるに石膏の劑を以つてするに、病已えて未だその害を見ざるなり。炎暑の時に方りて大渴引飲を患ひ、しかして渴して止まざる者あり。則ちそれに石膏末を服さしむるに、煩渴、頓に止みて、復その害を見ざるなり。石膏の渴を治する、怖るるに足らざるなり。斯れ以つて知るべきのみ。

陶弘景曰く、石膏は汗を発すと。是れ稽へざるの説にして、以つて公論となすべからず。仲景氏に斯

てしきりに水を飲む。陶弘景 神仙流の影響をうけた人で、名医別録の著者がある。陶隱居と号す(三三三三三三)。

吐劑 瓜蒂のような吐かす薬。汗劑 麻黄湯のような発汗劑。峻薬 作用のはげしい薬。

胸膈煩悶 胸の中が苦しくてもたえる。

胃 頭に何かかぶさっているような状。

衆医：多くの医者が、ひどく虚衰しているからとて、人參一味をせんじた独参湯を作つて与えた。

貼二錢 一回せんじる分量を包んだものが一貼で、その分量が二匁。錢は匁に同じ。

脈絶 脈をふれぬ。一蓋 蓋はさかづきのことで、大蓋、小蓋の別がある。

加州・奥州 加賀の国とみち

別録 名医別録の略称。

綱理白沢 きめが細かくて白くて光沢のあるもの。

雷敷 劉宋時の人。雷公炮炙論(いらい)の著者がある。

壁淨 明らかで滑い。

水精 水晶に同じ。

李時珍 明の人。本草書としてもっともポピュラーな本草綱目の著者として有名である。

細文短密 細かいめで、それが短く密になっている。

米糕 飯物性の薬。

火烟 火でやく。

白陶土・唐滑石。天然の陶土で、成分は含水珪酸アルミニウム。

小便の不利 小便の出がわるいこと。

淋家 尿が淋瀝して快通しない病氣を持っている人。尿道炎、膀胱炎、膀胱結石、前立腺炎などが、この中に包含せられ、必ずしも今日の淋菌による尿道炎とは限らない。軟滑 上等の滑石は、指先でもんでみるに、軟くてすべすべしている。宗輿 寇宗奭。宋代の人。本草衍義(い)の著者がある。滑膩 なめらかなこと。

品考

石膏 本邦処処に出づ。加州・奥州最も多し。しかして硬軟の二種あり、軟なるもの上品なり。別録に曰く、細理白沢のものよしと。雷敷曰く、その色壁淨にして水精の如しと。李時珍曰く、白きは、潔淨、細文短密、鍼を束ぬるが如しと。為則曰く、石薬を探るの道は、下底を佳となす、その久しくして能く化するを以つてなり。石膏を探るに、その上頭におけるものは、状米糕の如く、その下底におけるものは、壁淨にして水精の如し、此れそれ上品なり。之れを用ふるの法は、唯之れを打ち砕くのみ。近世、火烟して之れを用ふ。此れその性を寒となすを以つての故なり。臆測のためなり。余は則ち取らず。大凡製薬の法は、製して毒を倍すれば則ち之れを製す。毒を去るは則ちしからず。是れ毒の外に能なればなり。諸薬のもと、その当に製すべきものは、その製を詳にするなり。製せざるものはしからず。下皆之れに倣へ。

滑石 小便の不利を主治するなり。旁ら渴を治す

なり。余嘗て青山侯の臣、蜂大夫の病を治す。その証、平素、毒、脊上に着き、七椎より十一椎に至り、痛み忍ぶべからず。発すれば則ち胸膈煩悶して渴し、甚しければ則ち冒して人事を省みざること、年数あり。一日、大いに発し、衆医おもへらく大虚と爲めに独参湯を作り、貼二錢、日に三服す、六日にして未だ知らざるなり。医皆おもへらく必ず死すと。是において家人余を召して之れを診するに、脈絶して死状の如し。但その胸を診するに、微しく煩悶の状あるを覚ゆ。乃ち石膏黄連甘草湯を作りて之れを与ふ。一劑の重さ三十五錢、水一蓋六分を以つて煮て六分を取り頓服し、昏より暁に至つて、三劑を反さしむ。通計一百有五錢。暁に及んで、その証猶ほ夢のごとくにして頓に覚む。次日、余辞して京師に帰らんとす。病客曰く、一旦にして訣別するは、吾れ則ち堪へず、請ふ君と行を与にし、朝夕、左右においてせんと。遂に俱に京師に帰る。爲めに石膏を用ふること故の如くして、居ること七八十許日にして、癒ゆるを告ぐ。石膏の峻薬にあらざりて、怖るべからざるや、以つて見るべきのみ。

考徴

猪苓湯証に曰く、渴して水を飲まんと欲し、小便不利。

以上一方、滑石一匁。

右此の一方。斯れ滑石の主治するところを見るべし。滑石白魚散証に曰く、小便不利。蒲灰散証に曰く、小便不利。余未だ二方を試みず。是れを以つて徴に取らず。

互考

余嘗て淋家痛み忍ぶべからずして渴する者を治するに、滑石礬甘散を用ひ、その痛み立ころに思む。屢試屢効、知らざるべからざるなり。

品考

滑石 和漢共にあり。処処の山谷多く之れを出すなり。軟滑にして白きもの、薬に入れて効あり。宗輿曰く、滑石は今之れを画石と謂ふ。その軟滑にして面を写すべきに因るなり。時珍曰く、その質滑膩、故に以つて之れに名づく。

芒消 芒硝。近年まで硫酸ナトリウムをあてていたが、正倉院にある芒硝が硫酸マグネシウムであることからこれが正しいとされる。徳川時代はすべて硫酸ナトリウムを用いた。

心下痞堅 みずおちがつかえて硬いこと。痞はつかえること。患者の自覚症状。堅は医者が診察して他覚的に抵抗をおぼえて硬いこと。

心下石硬 みずおちが石のように硬い。硬は硬と同じ。小腹急結 下腹部に腹診によって急迫性の痛みを訴える結条物。瘀血の腹証。補結胸 胸が石のように硬く隆起している状態。

燥屎 乾燥して硬くなった糞宿食 食物が消化せられず胃腸内に停滞していること。小腹痛痞 下腹の一部が腫れてつかえたような状態。

項亦強ばる うなじがこる。腹脹満 腹が膨満している状態。心煩 胸がうるし。

外台秘要 唐の王焘(ひの)の著で四十巻からなり、千金要方とともに唐代を代表する医学書。消石 硝石、焰消(硝)、硝酸カリウムであるが、古方家の本草は芒硝の別名とした。

芒消 堅を栗かにするを主る。故に能く心下痞堅・心下石硬・小腹急結・結胸・燥屎・大便鞭を治す。しかしして旁ら宿食・腹満・小腹痛痞、之れ等諸般の難解の毒を治するなり。

考徴

大陷胸湯証に曰く、心下痛み、之れを按じて石硬。以上一方、芒消一升。分量疑ふべし。故に千金方の大陷胸丸に従つて、大黃八両、芒消五両に作る。

大陷胸丸証に曰く、結胸は項亦強ばる。以上一方、芒消半升。分量亦疑ふべし。故に千金方に従つて五兩に作る。調胃承氣湯証に曰く、腹脹満。又曰く、大便通ぜず。又曰く、吐せず下さず心煩。

以上一方、芒消半斤。分量亦疑ふべし。今千金方・外台秘要を考ふるに、此の方あることなし。故に姑く桃核承氣湯に従つて、以つて芒消の分量を定む。

柴胡加芒消湯は証密に備らざるなり(説は互考の中に在り)。

柴胡加芒消湯は是の小柴胡湯にして芒消を加ふるものなり。しかしして小柴胡湯は胸脇苦満を主治して、その塊を治する能はず、芒消を加ふる所以なり。人参の弁誤中の説を見れば則ち以つて知るべきなり。

品考

消石 和漢別なし。朴消・芒消・消石、本是れ一物。しかしして各形状を以つて之れを名づくるなり。その能異なるなし。しかしして芒消の功勝れり。故に余家之れを用ふ。

甘草 急迫を主治するなり。故に裏急・急痛・急を治す。しかしして旁ら厥冷・煩躁・衝逆、之れ等諸般の急迫の毒を治するなり。

考徴

芍薬甘草湯証に曰く、脚攣急。芍薬甘草湯証に曰く、厥して咽中乾き、煩躁。甘草瀉心湯証に曰く、心煩安きを得ず。生姜甘草湯証に曰く、咽燥いて渴す。桂枝人参湯証に曰く、利下止まず。

以上一方、芒消六兩。

大承氣湯証に曰く、燥屎。又曰く、大便鞭し。又曰く、腹満。又曰く、宿食。

大黃牡丹湯証に曰く、小腹痛痞。

木防己去石膏加茯苓芒消湯証に曰く、心下痞堅云云、復与へて愈えざる者。

以上三方、芒消皆三合。

大黃消石湯証に曰く、腹満。以上一方、消石四兩。

橘皮大黃朴消湯証に曰く、膈之れを食して心胸に在つて化せず、吐せんとして復出です。

桃核承氣湯証に曰く、小腹急結。

以上二方、朴消・芒消皆二兩。消癥散証に曰く、腹脹。

以上一方、消石等分。

右此の數方を歴観するに、芒消は堅塊を主治するや明らかなり。堅を栗かにするの功あり。故に旁ら宿食・腹満・小腹痛痞、之れ等諸般難解のもの治するなり。

互考

芍薬甘草湯証に曰く、咽痛の者。桔梗湯は証具らざるなり(説は互考の中に在り)。桂枝甘草湯証に曰く、叉手して自ら心を冒ふ。桂枝甘草龍骨牡蠣湯証に曰く、煩躁。四逆湯証に曰く、四肢拘急、厥逆。甘草粉蜜湯証に曰く、人をして涎を吐せしめ、心痛発作時あり、毒藥にて止まず。

以上二方、甘草皆三兩。甘草湯証に曰く、咽痛の者。桔梗湯は証具らざるなり(説は互考の中に在り)。桂枝甘草湯証に曰く、叉手して自ら心を冒ふ。桂枝甘草龍骨牡蠣湯証に曰く、煩躁。四逆湯証に曰く、四肢拘急、厥逆。甘草粉蜜湯証に曰く、人をして涎を吐せしめ、心痛発作時あり、毒藥にて止まず。

以上六方、甘草皆二兩。右八方、甘草二兩、三兩、しかしして亦四兩の例。芍薬甘草湯証に曰く、脚攣急。芍薬甘草湯証に曰く、厥して咽中乾き、煩躁。甘草瀉心湯証に曰く、心煩安きを得ず。生姜甘草湯証に曰く、咽燥いて渴す。桂枝人参湯証に曰く、利下止まず。

小建中湯証に曰く、裏急。半夏瀉心湯証に曰く、心下痞。小柴胡湯証に曰く、心煩。又云ふ、胸中煩。

のあたりの痛み。
毒薬 作用のはげしい薬。この毒薬は、東洞の主張する毒薬の意味とはちがっている。胸下悸、胸の下で動悸がする。氣小腹より。下腹から何かは衝き上ってくる。氣は働きはあがるが形の無いもの。心下痞 みずおちがつかえる状。

咳逆倚息 せき込んで、物によりかかって呼吸をして、横臥できない。
心逆搶す 腹から胸にかけて突きあがるように痛む。
噎氣 おくび。
拘急して 筋肉や関節がひきつって寝返りができない。
少腹 小腹に同じ。下腹をさす。

奔豚 金匱要略に、「奔豚の病は小腹より起り、上って咽喉を衝き、発作死せんと欲し復還り止む、皆驚恐よりこれを得」とあって、ヒステリーや神経症によるはげしい心悸亢進の発作をいう。
驚狂起臥安からず おどろきやすく精神不安で静かにじっとしておれない。
病者急を 素問の靈氣法時論の「肝者、肝、急食、甘以緩之」とある。

主証 主となる証。証に主証と客証とがあり、客証は出沒去來する。補
鬱鬱微煩 氣分がふさいでもだれる。
結実 草木が実を結んだように、硬くなった状。
結毒 毒が一か処にかたまつたもの。
衆薬の主たり もろもろの薬の中で主となるもの。
孫思邈 隋唐間の人で、博學で、易老の説をおさめ、陰陽術数の理を明らかにし、導引医療の術に精しく、唐の太宗に召されて京師に行った時は九十余歳であったが、心身ともに若々しく、官に就くことを謝絶して山に帰り、百余歳で逝った。著書に千金方・千金翼方等がある。新・旧の唐書に伝が詳しい。
百薬の毒を解す もろもろの薬の毒を解く作用がある。
甄權 唐の人、鍼術に詳しく、太宗より凡杖衣冠を賜り、百三歳で没した。伝は新唐書の方技伝にあり。

本功 ほんとうの薬功。
藥 微卷之上

小青竜湯証に曰く、咳逆倚息。
黄連湯証に曰く、腹中痛。
人參湯証に曰く、心を逆搶す。
旋覆花代赭石湯証に曰く、心下痞硬、噎氣除かれず。

烏頭湯証に曰く、疼痛して屈伸すべからず。又云ふ、拘急して転側するを得ず。
以上十方、甘草皆三兩。
排膿湯は証闕く説は桔梗の部に在り。
調胃承氣湯証に曰く、吐せず下さず、心煩。
桃核承氣湯証に曰く、その人狂の如し。又云ふ、少腹急結。
桂枝加桂湯証に曰く、奔豚、氣、少腹より心に上衝す。

桂枝去芍薬加蜀漆竜骨牡蠣湯証に曰く、驚狂、起臥安からず。
以上五方、甘草皆二兩。
右此の諸方を歴観するに、急迫を論ずることなし。その他曰く痛、曰く厥、曰く煩、曰く悸、曰く嘔、曰く上逆、曰く驚狂、曰く悲傷、曰く吐衄、曰く汗、曰く汗を發して病解せず、反つて悪寒すと。是れ悪寒は附子之れを主る。しかして芍薬甘草は則ち主証なきなり。故に此の章の義は、芍薬甘草湯の脚纏急する者を以つて、此の悪寒に随つて、則ち此の証始めて備る。

為則按するに、調胃承氣湯・桃核承氣湯、俱に甘草あり。しかして大小承氣湯・厚朴三物湯は皆甘草なきなり。調胃承氣湯証に曰く、吐せず下さず心煩と。又曰く、鬱鬱微煩と。此れ皆その毒の急迫の致すところなり。桃核承氣湯証に曰く、或は狂の如し、或は少腹急結と。是れ結実ありと雖も、然れども狂と急結と、此れ皆急迫たり、故に甘草を用ふるなり。大小承氣湯・厚朴三物湯・大黃黃連瀉心湯、但その結毒を解するのみ。故に甘草なきなり。學者諸を詳にせよ。

并誤
陶弘景曰く、此の草最も衆薬の主たりと。孫思邈曰く、百薬の毒を解すと。甄權曰く、諸薬中甘草を君となし、七十二種の金石の毒を治し、一千二百般

曰く利下、皆甘草の主るところ、しかして急迫するところあるものなり。仲景の甘草を用ふるや、その急迫劇しき者は、則ち甘草を用ふることも亦多し。劇しからざる者は、則ち甘草を用ふることも亦少なし。是れに由つて之れを觀れば、甘草の急迫を治するや明らかなり。古語に曰く、病者急を苦しめば、急に甘を食して以つて之れを緩くすと。それ斯れ甘草の謂か。仲景甘草の方を用ふること甚だ多し。然れども、その用ふるところのものは、前証に過ぎず。故に枚挙せず。凡そ徴多くして証明らかなるものは、その徴を枚挙せず。下皆之れに倣へ。

互考
甘草湯証に曰く、咽痛の者には甘草湯を与ふべし、差えざる者には桔梗湯を与ふ。凡そその急迫して痛む者は、甘草之れを治す。その膿ある者は、桔梗之れを治す。今その急迫して痛むを以つての故に甘草湯を与ふ。しかしてその差えざる者は已に膿あるなり。故に桔梗湯を与ふ。此れに挾つて之れを推せば、則ち甘草の主証、得て見るべきなり。

の草木の毒を解す、衆薬を調和するに功あり。此の説一たび出でて、天下復甘草の本功を知るなし。亦悲しからずや。若し三子の説に従はば、則ち諸凡の解毒は、唯須らく此の一味にて足るべし。今必ずしも然る能はず、則ちその説の非や以つて知るべきのみ。夫れ諸薬の本功を知らんと欲せば、則ち長沙の方中に就き、その有無多少とその去加とを推歴し、之れをその証に引けば、則ちその本功得て知るべきなり。しかして長沙の方中、甘草なきもの半に居る、衆薬の主と謂ふべからず、亦以つて見るべきのみ。古語に曰く、病を攻むるに毒薬を以つてすと。薬は皆毒、毒は即ち能、若しその毒を解かば、何の功か之れあらん。思はざるの甚し。學者諸を察せよ。夫れ陶弘景・孫思邈は医家の俊傑、博洽の君子なり。故に後世之れを尊奉すること至れり。しかして甘草を衆薬の主と謂ひ、百薬の毒を解くと謂ふ。豈に微なきを得んや。之れを長沙の方中に考ふるに、半夏瀉心湯は本甘草三兩、しかして甘草瀉心湯は更に一兩を加ふ。是れ前に足して四兩となす。しかして誤薬の後に之れを用ふ。陶・孫は蓋し卒爾に之れを見

藥 微卷之上

長沙の方中 傷寒論の著者張仲景は長沙の太守であつたと伝えられているので、長沙の方中とは、傷寒論・金匱要略の薬方の中ということ。去加 薬方の原方から一味または二味の薬物を去つたり、加えたりしたもの。病を 素問の移精變氣論の「今世治病、毒藥治其内」；異法方宜論の「其治宜毒藥」；からとつたものか。

文法則。

東垣李 李杲、字を明之、東垣老人と号した。金元の間に活躍した名医で、治療の要諦は、脾胃(消化器)を補うことを主とすべしと唱え、内外傷弁惑論・脾胃論・蘭室秘藏・湯液本草など著書が多い(二〇一―二〇五)。

生補

心火 五行説で、心は火に相当し、腎水に相對する。素問の陰陽志象大論に、「南方生熱、熱生火、火生苦、苦生心云々」とある。三焦 諸種の解釈があるが、ここでは、六腑の一つで、形がなく作用のある元氣の源泉を指している。五臟の浮腫 五臟六腑を五行

に作用する氣は長物のない空闊であるとの意。五臟 中國の産。黃耆 中國に産するマメ科の多年草カウネウキの根。肌表 からだの表面。黃汗 衣が黄色に染まる汗。盜汗 眠っている間に出る汗。皮水 浮腫の一種。金匱要略に、「皮水其脈浮外証浮腫按之没指」。

不仁 知覚麻痺。惡風 惡寒の輕症で、風にあたりと不快感をおぼえる。腰腫弛痛 腫はものつけねのことだから、腰から股關節のあたりがだるくいたむ。下汗なし 腰から下に汗がない。的然 はつきりしているさま。金匱要略 傷寒で代表される急性熱病以外の一般雜病の治療を論じているので、雜病論とも称せられる。裏攻 裏考に同じ。公平に考える。虚損 体力が衰え弱っていること。虚勞に同じ。五勞 心勞・肝勞・脾勞・肺勞・腎勞。勞は虚勞の意で、衰弱していること。羸瘦 やせていること。喘 衰弱して呼吸の苦しい

て、ために薬毒を解くと謂ふ。嗚呼夫れ人の過ちや、各その党においてす。故に二子の過ちを觀るに、斯れ仲景を尊信するの至を知る。向きに陶・孫をして、仲景誤薬の後に、甘草を用ふる所以としからざることを知らしめば、必ずその過ちを改めん。何となれば、陶・孫は誠に俊傑なればなり。俊傑何ぞその過ちを文となさん。是れに由つて之れを觀るに、陶・孫は實は甘草の本功を知らざるなり。亦後世の不幸なるかな。

東垣李氏曰く、生にて用ふれば則ち脾胃の不足を補ひ、しかして大いに心火を瀉す、之れを炙れば則ち三焦の元氣を補ひ、表の寒を散すと。是れ仲景の言はざるところなり。五臟の浮説は戰國以降。今疾医をなさんと欲せば、則ち五臟を言ふべからず。五臟の浮説は戰國以降、従ふべからず。

品考

甘草 華産は上品。本邦産するところのものは、用ふるに堪へざるなり。余が家唯劉みて之れを用ふるなり。

始するなり、故に唯く黃汗、盜汗、皮水を治す、又能く身體腫或は不仁の者を治す。是れ腫と不仁とは亦皆肌表の水なり。

五考 著芍桂枝苦酒湯、桂枝加黃耆湯、同じく黃汗を治するなり。しかして著芍桂枝苦酒湯証に曰く、汗衣を沾すと。是れ汗甚だ多きなり。桂枝加黃耆湯証に曰く、腰已上必ず汗出で、下汗なしと。是れ汗少なきなり。此れを以つて之れを考ふるに、汗の多少は即ち黃耆を用ふることも多少、則ちその功、的然として知るべきなり。

防已黃耆湯、防已茯苓湯は、同じく肌膚の水腫を治するなり。しかして黃耆、多少あり。防已黃耆湯証に曰く、身重く汗出づと。防已茯苓湯証に曰く、水氣皮膚中に在りと。此れ水氣の多少に随つて、黃耆も亦多少あり。則ち黃耆の肌表の水を治するや明らかなり。故に著芍桂枝苦酒湯・桂枝加黃耆湯、汗の多少に随つて、黃耆を用ふるも亦多少あるなり。黃耆桂枝五物湯証に曰く、身體不仁と。為則按ずるに、仲景の不仁を治するや、その所在に随つて方

考徴 著芍桂枝苦酒湯証に曰く、身體腫れ、発熱、汗出でて渴す。又云ふ、汗衣を沾し、色正黄にして薬汁の如し。防已黃耆湯証に曰く、身重く、汗出で惡風。以上二方、黃耆皆五兩。以上三方、黃耆皆三兩。桂枝加黃耆湯証に曰く、身常に暮に盜汗出づる者。又云ふ、腰より以上必ず汗出で、下汗なく、腰腫弛痛、物ありて皮中に在る状の如し。以上一方、黃耆二兩。以上一方、黃耆一兩半。

古此の諸方を應觀するに、黃耆は肌表の水を主

余嘗て、本草、黃耆の功を載するを讀むに、陶弘景曰く、丈夫の虚損・五勞・羸瘦を補ひ、氣を益すと。甄權曰く、虚喘・腎衰・耳聾・内補を主ると。嘉謨曰く、人參は中を補ひ、黃耆は表を実すと。余亦嘗て金匱要略を讀み、仲景の処方を審にするに、皆黃耆を以つて皮膚の水氣を治し、未だ嘗て、虚を補ひ表を实するを言はず。為則嘗て之れを聞く。周公は医職に四を置く。曰く食医。曰く疾医。曰く瘍医。曰く獸医。夫れ、張仲景は、蓋し古疾医の流なり。夫の陶弘景は仙方を尊信するの人なり。故に仲

二三五

二三五

こと。

腎衰 腎のはたらきが衰えて
いることだが、この腎はいま
の腎臓の他に生殖機能までも
指している。

耳聾 難聴。

内補 内は体内を指し、内臓
を指す。補は力をつける。
嘉慶 明代の名医で本草蒙筌
の著者がある。

中 からだの中。

仲景の処方 張仲景が傷寒論
と金匱要略を作ったというこ
とになっているので、これら
の書物の中の処方。

周公 周の文王の子で、武王
の弟、名を旦という。

医職 医の職域。以下の四医
は周礼天官にみえる。

傷医 外科医。

仙方 不老長寿を研究する神
仙流の医方。

養氣を論じ、元氣を養うこ
とを論じ、延命長寿を話題に
する。

酒酒 水がさかんに流れるよ
うに世に広がること。

奔飲 走っているけもの。
毒深 薬はすべて毒であり、
病氣も毒によって起るとい
うのが東洞の主張である。

邪氣 病氣の原因となる邪。

景は動もすれば疾病を言ふ。しかしして弘景は動もす
れば養氣を論じ、延命を談じ、未だ嘗て疾病を論ぜ
ず。後世の医方を喜ぶ者、皆その俊傑に眩じて、そ
の疾医に害あるを知らず。彼の尊信するところ我れ
之れを尊信し、酒酒たる者天下皆是れなり。豈に亦
悲しからずや。夫れ奔飲を逐ふ者は大山を見ず。嗜
欲外に在れば則ち聰明蔽はる。故にその物を見るこ
と同じくして、物を用ふるの異なるなり。仲景は
疾病を主る者なり。弘景は延命を主る者なり。仲景
は黄耆を以つて水氣を治す。弘景は之れを以つて虚
を補ふ。夫れ薬は毒なり。毒薬何の補をか之れなさ
ん。是れ補せざるを以つて補となす。補せざるを以
つて補となすは、是れその聰明、延命の欲の蔽ふと
ころとなるなり。古語に曰く、邪氣盛んれば則ち
突し、精氣奪はるれば則ち虚すと。夫れ古謂ふと
ころの虚実は、その常を以つて之れを言ふなり。昔、
常にはなきもの、今則ち之れあり、則ち是れ実なり。
昔、常にあるもの、今則ち之れなし、則ち是れ虚な
り。邪は常にはなきものなり。精は常にあるものな
り。故に古謂ふところの實は病なり、しかしして虚は

精なり。病に因つて虚すれば、則ち毒薬以つてその
病毒を解く。しかししてその故に復するなり。病にあ
らずして虚すれば、則ち毒薬の治するところにあ
らず、穀肉を以つて之れを養ふ。故に曰く、病を攻む
るには毒薬を以つてし、精を養ふには穀肉果菜を以
つてすと。今試みに之れを論ぜん。天寒く肌膚粟起
す。此の時に當つて、黄耆を服して已まず、衣衾を
以つてすれば則ち已む。衣衾を以つてして已まず、
粥を飲つて已む。他なし、是れ病にあらずして精虚
するなり。もし手足拘急して悪寒せば、是れ衣衾を
与へて已まず、粥を飲つて已まず、毒薬を与へて已
むなり。他なし、是れ邪の実なり。嗚呼、仲景氏や、
信にして微あり。此れ孔子の法言にあらざんば敢へ
て道はざる所以なり。甄權・嘉謨は疾医の法言を言
はず。抑、亦弘景之れが補ひをするなり。言必ず仙
方を以つてし、必ず陰陽を以つてす。此れ耆の功の
著らかならざる所以なり。

下品なり。その輔星・本邦に出づるものも亦皆下品
なり。今華船の載せて来るところのもの、多くは是
れ下品、扱げざるべからず。凡そ黄耆の品、柔軟、
肉の中白く、色潤沢、味甘し。是れ上品となす。剉
み用ふ。

黄耆 漢土・朝鮮・本邦皆産するなり。漢土に出
づる類の上なるもの、以つて上品となす。その他皆
腹中重

人參 心下痞堅・痞硬・支結を主治するなり。旁
ら不食・嘔吐・喜唾・心痛・腹痛・煩悸を治す。

呉茱萸湯証に曰く、穀を食して嘔せんと欲す。又
曰く、乾嘔、涎沫を吐す。

木防己湯証に曰く、心下痞堅。
以上一方、人參四兩。

大半夏湯証に曰く、嘔して心下痞硬。
茯苓飲証に曰く、氣満ちて食する能はず。

人參湯証に曰く、心中痞。又曰く、喜唾久しく了
了たらず。

乾姜黄連黄芩人參湯証に曰く、食口に入れれば即
ち吐す。

桂枝人參湯証に曰く、心下痞硬。

桂枝加芍薬生姜人參新加湯は証具らざるなり(説
は互考の中に在り)。

半夏瀉心湯証に曰く、嘔して腸鳴り、心下痞。

白虎加入參湯は証具らざるなり(説は互考の中に在
り)。

生姜瀉心湯証に曰く、心下痞硬・乾嘔食臭。

以上十四方、人參皆三兩。

甘草瀉心湯証に曰く、心下痞硬して満、乾嘔・心
煩。又曰く、飲食を欲せず、食臭を聞くを惡む。

柴胡桂枝湯証に曰く、心下支結。
乾姜人參半夏丸証に曰く、嘔吐止まず。

小柴胡湯証に曰く、默默として飲食を欲せず、心
煩喜嘔。又云ふ、胸中煩。又云ふ、心下悸。又云ふ、

四逆加入參湯は証具らざるなり(説は互考の中に在
り)。

煩喜嘔。又云ふ、胸中煩。又云ふ、心下悸。又云ふ、

以上三方、その人參を用ふる者、或は一兩半、
或は一兩、しかして亦三兩の例。

古語に、古人が突とよんだ
のは、病毒の充実した状で、
虚というのは、精力の衰えた
状であるの意。
肌膚粟起 悪寒などしてさむ
けを感じる時は、俗にいうと
りはだになる。
衣衾 着物と蒲団。
法言 てほんになるような正
しい言葉。
心下痞堅 二三〇頁注参照。
支結 心下支結の略で、心下
部に腹直筋が硬く突っばって
いる状。
嘔吐 嘔はげえげえと声を伴
うて吐くをいい、吐は声を伴
うことなく吐く。
煩悸 胸苦しく動悸がする。
心中痞 わねにつかえる。
喜唾久しく了了たらず つば
がしきりに出て胃の氣持がさ
っぱりしない。
乾嘔食臭 たべたものの匂の
するおくび。
乾嘔 からえずき。何にも物
は出ないで、はきそうになる
をいう。
喜嘔 たびたび嘔吐すること。
心下悸 みずおちのあたりで
動悸がすること。
穀を食して嘔せんと欲す 食

心下痞堅 痞硬・支結を主治するなり。旁
ら不食・嘔吐・喜唾・心痛・腹痛・煩悸を治す。
考徴
木防己湯証に曰く、心下痞堅。
以上一方、人參四兩。
人參湯証に曰く、心中痞。又曰く、喜唾久しく了
了たらず。
桂枝人參湯証に曰く、心下痞硬。
半夏瀉心湯証に曰く、嘔して腸鳴り、心下痞。
生姜瀉心湯証に曰く、心下痞硬・乾嘔食臭。
甘草瀉心湯証に曰く、心下痞硬して満、乾嘔・心
煩。又曰く、飲食を欲せず、食臭を聞くを惡む。
小柴胡湯証に曰く、默默として飲食を欲せず、心
煩喜嘔。又云ふ、胸中煩。又云ふ、心下悸。又云ふ、

以上三方、その人參を用ふる者、或は一兩半、
或は一兩、しかして亦三兩の例。

事せとると吐きたくなるの意で、実際に吐くこともある。涎沫、涎はよだれ、沫はつば。氣満ちて食する能はず、胃にガスがたまつて、そのためにたべられない。嘔吐、せきをしてたんを吐く。

癭、硬に同じ。

應響の如し、反応が響のようによくあらわれる。

考証、考えしらるる。癭、硬にして復發する。癭は、桂枝湯加芍薬生薬八参新加湯は、その証具らざるなり。その發汗後、身疼痛を云ふは、是れ桂枝湯の証なり。然れば則ち芍薬生薬八参の証闕くるなり。説は類聚方に在り。

四股沈重疼痛、四肢は上肢二本と下肢二本で、手という場合は、上肢の手首から先端をいい、足という場合は、下肢の足首から先端をいう。だから傷寒論で、四肢という場合と、手足という場合とは内容がちがつてくる。その四肢が重くいたむ。
參、人參の略称。
支飲喘滿、浮腫があつて胸がつまつたようで、喘鳴がある。金匱要略の痰飲咳嗽病篇に「欬逆倚息、氣短不得臥、其形如腫、謂之支飲」とあつて心臓弁膜症で代償機能の障害が起つた時にみられる症状。
黧黑、黒くてやや黄色をおびた状。
字詰、文字の意味を解説したもの。
実となすあり、素問の調經論の「岐伯曰、有者為実、無者為虚」を、東洞は本文のように改めて引用している。

附子湯は証具らざるなり(説は五考の中に在り)。黄連湯証に曰く、腹中痛、嘔吐せんと欲す。旋覆花代赭石湯証に曰く、心下痞硬、噎氣除かれず。

大建中湯証に曰く、心胸中大いに寒え痛み、嘔して飲食する能はず。

以上四方、人參皆二両。

右此の諸方を歴観するに、人參は心下結実の病を主治するなり。故に能く心下痞堅・痞硬・支結を治し、旁ら不食・嘔吐・喜唾・心痛・腹痛・煩悸を治す。亦皆結実して致すところのものは、人參之れを主るなり。

為則按するに、人參・黄連・茯苓の三味は、その功大同にして小異なり。人參は心下痞硬して悸するを治するなり。黄連は心中煩して悸するを治するなり。茯苓は肉瞶筋惕して悸するを治するなり。知らざるべからず。

互考

木防已湯条に曰く、心下痞堅、愈えて復發する者は、去石膏加茯苓芒消湯之れを主ると。是人參、

桂枝湯加芍薬生薬八参新加湯は、その証具らざるなり。その發汗後、身疼痛を云ふは、是れ桂枝湯の証なり。然れば則ち芍薬生薬八参の証闕くるなり。説は類聚方に在り。

白虎加人參湯の四条の下、俱に是れ人參の証あることなし。蓋し張仲景の人參三両を用ふるや、必ず心下痞硬の証あり。此の方独り否す。此れに因つて千金方・外台秘要を考覈するに、共に白虎湯之れを主るに作る。故に今尽く之れに従ふ。

乾姜人參半夏丸、本治の例に依つて、試みにその功を推すに、心下に結実の毒あり、しかして嘔吐止まざる者、實に是れ之れを主る。大抵、大半夏湯の主治するところと、大同小異にして、緩急の別あり。

四逆加入參湯はその証具らざるなり。惡寒・脈微にして復利すと。是れ四逆湯の主るところにして、人參の証を見ざるなり。此の方、人參を加ふること僅かに一兩と雖も、見証なければ則ち何ぞ以つて之れを加へん。是れ心下の病証を脱するや明らかなり。

附子湯は証具らざるなり。此の方の真武湯と独り差ふもの一味、しかしてその方意におけるや、大い

芒消、心下痞硬と痞堅とを治するを分つ。是において、古人の用藥苟しくもせざるを見るべし。蓋しその初め心下痞堅猶ほ緩し、之れを痞硬と謂ふも亦可なり。故に投するに人參を以つてするなり。復發して愈えず、しかして痞の堅や必せり。故に投するに芒消を以つてするなり。

半夏瀉心湯は輒の字を脱するなり。甘草瀉心湯は此の方中、甘草を倍す。生姜瀉心湯は生姜を加ふるの湯なり。しかして共に心下痞硬を治するを云ふ。則ち此の方は輒の字を脱するや明らかなり。

呉茱萸湯・茯苓飲、乾姜黄連黄芩人參湯、六物黄芩湯・生姜甘草湯は皆人參三両。しかして欬唾・涎沫・嘔吐・下利を治するを云ひ、心下痞硬を治するを云はず。是において仲景の欬唾・涎沫・嘔吐・下利を治する方中を綜考するに、その人參なきもの、十に居ること七八。今人參の本例に依つて、此の五湯を用ふるに、之れを心下痞硬して欬唾・涎沫・嘔吐・下利する者に施すに、その應響の如し。是れに由つて之れを観るに、五湯の証は、悉に是れ皆心下痞硬の証なり。

に理屈あり、附子湯は心下痞硬にして、身疼痛、或は小便不利、或は心下痞硬の者を主る。真武湯は、茯苓芍薬君薬にして、肉瞶筋惕・拘攣・嘔逆・四肢沈重疼痛の者を主る。

旋覆花代赭石湯はその人參を用ふること二両にして、心下痞硬の証あり。此れ小半夏湯加減の方なり。二両は疑ふらくは当に三両に作るべし。

弁誤

甄權曰く、參は虚を補ふと。誤まれり。此の言一たび出でて、毒を千載に流す。昔、張仲景の參を用ふるや、防已湯より多きは莫し。その証に曰く、支飲喘滿・心下痞堅・面色黧黑と。未だ嘗て虚を補ふを言ふ者を見ざるなり。又曰く、虚する者は即ち愈ゆ。実する者は、三日復發し、復与へて愈えざる者は、去石膏加茯苓芒消湯之れを主ると。此れその誤りに由るところのものか。則ち大いに然らざるあり。蓋し漢以降、字詰古からざるもの多し。則ちそれ解し難し。古語に曰く、実となすあり、虚となすなしと。故に防已湯を用ひて、心下痞堅に虚してなき者は則ち愈ゆるなり。則即ち愈ゆと雖も、心下痞

本草：本草綱目に、広雅をひき、人参とよぶに至つた由来をのべている。広雅は魏の張揖の撰の字書。五行記に、隋の文帝の時、人体そのままの四肢が完全に備つた人参を発見した話が見える。一氣、万物に分れないうちの一つの氣、これが分れて陽と陰に分れる。晋書に「若一氣生兩儀」とある。

先天的氣、生れない先からある元氣。後天的氣は生れてのちに生ずる元氣。鬪冠子、書物の名称であるが、作者不明。漢書芸文志に「楚人、深山に居り、鵬を以てて冠とす」とある。董仲舒、董仲舒は漢の広川の人。若くして春秋をおさめ景帝の時博士となり、春秋繁露十七卷を著す。揚雄、漢代の儒家。蜀郡成都の人。解嘲はその著。孔安国、孔子十二世の孫で漢代の儒家。吳天、天空。漢書、後漢の班固の撰。百二十卷。禮儀志、一朝の楽律と曆法の沿革をのべてた史志の一編。大戴、大戴禮に同じ。揚雄、

故に元氣を立てて山つて、陰陽五行元氣の説、蔓延して其るべからず。医道の渾沌は、職として此れに之れ由る。豈に欺ぜざるべけんや。夫れ医術は人事なり。元氣は天事なり。故に仲景は言はず。精を養ふには、穀肉果菜を以つてす。しかして人参、元氣を養ふは、未だ嘗て之れを言ふことあらず。此れに由つて之れを観るに、その元氣を養ふと言ふは、後世の説なり。従ふべからず。

東垣李氏曰く、張仲景云ふ、病人、汗して後、身熱・亡血、脈沈遅の者、下利・身涼、脈微血虚の者、並びに人参を加ふるなり。古人、血脱の者を治するに、氣を益す。血は自ら生ぜず、須らく陽氣を生ずべし。蓋し陽氣生ずれば、則ち陰長じて血乃ち旺なりと。今傷寒論中を歴考するに、利止み、亡血するや、四逆加入參湯之れを主ると曰ふ。李氏は、それ此の言に拠るか。然れども人参を加ふるもの、僅僅一両なり。四逆加入參湯に更に茯苓を加へ、此れを茯苓四逆湯となす。しかして血証を挙げず。則ち人参の亡血のためにあらざるや、以つて見るべきの

堅猶は実してある者は、三日復発す。復防已湯を与へて愈えざる者は、特に病癭にあらざり、即ち是れ堅なり。參の主るところにあらずして芒消之れを主る。故に參は故の如くにして、芒消・茯苓を加ふ。是れに由つて之れを觀れば、參、虚を補ふと謂ふべからざるなり。遜思邈曰く、參なければ則ち茯苓を以つて之れに代ふと。此の説、誤ると雖も、然れども參は虚を補はずして心下の疾を治す、亦以つて微するに足るのみ。蓋し、參、虚を補ふの説、甄權に昉り、滔滔たる者天下皆是れなり。本草終に広雅の五行記を引く。是れ參の名義にして、豈に參の実ならんや。學者諸を詳にせよ。

藥 微 卷 之 上

氣は、免身の初め、生を以つて實ところ、医家の謂ふところの先天の氣なり。之れを養ふに、穀肉果菜を以つてするは、謂ふところの後天的氣なり。然りと雖も、元氣の説は、聖人言はず、故に經典載せず。戦国以降、始めて斯の言あり。鬪冠子曰く、天地は元氣に成ると。董仲舒の春秋繁露に曰く、王正しければ則ち元氣和順なりと。揚雄の解嘲に曰く、大氣は元氣を含むと。孔安国の虞書の註に曰く、昊天は元氣の廣大を謂ふと。漢書の律曆志に曰く、大極の元氣は函を一となすと。班固の東都賦に曰く、烟熅を降し、元氣を調ふと。此の數者は皆天地の元氣を言ひ、人の元氣にあらざるなり。素問に曰く、天の大氣は之れを挙げ、地の中に繋ぎて墜ざるを言ふなりと。又曰く、三焦は原氣の別使、皮膚毫毛の末、温暖の氣を言ふなりと。此れ猶ほ言ふべきがごときなり。然れども論說の言なり。疾医においては何の益か之れあらん。又曰く、精を養ふに穀肉果菜を以つてするは、是れ古の道なりと。未だ草根木皮を以つて、人の元氣を養ふを聞かず。蓋しその説は道家に出づ。道家の推言するところは其命長ず、

故に元氣を立てて山つて、陰陽五行元氣の説、蔓延して其るべからず。医道の渾沌は、職として此れに之れ由る。豈に欺ぜざるべけんや。夫れ医術は人事なり。元氣は天事なり。故に仲景は言はず。精を養ふには、穀肉果菜を以つてす。しかして人参、元氣を養ふは、未だ嘗て之れを言ふことあらず。此れに由つて之れを観るに、その元氣を養ふと言ふは、後世の説なり。従ふべからず。

東垣李氏曰く、張仲景云ふ、病人、汗して後、身熱・亡血、脈沈遅の者、下利・身涼、脈微血虚の者、並びに人参を加ふるなり。古人、血脱の者を治するに、氣を益す。血は自ら生ぜず、須らく陽氣を生ずべし。蓋し陽氣生ずれば、則ち陰長じて血乃ち旺なりと。今傷寒論中を歴考するに、利止み、亡血するや、四逆加入參湯之れを主ると曰ふ。李氏は、それ此の言に拠るか。然れども人参を加ふるもの、僅僅一両なり。四逆加入參湯に更に茯苓を加へ、此れを茯苓四逆湯となす。しかして血証を挙げず。則ち人参の亡血のためにあらざるや、以つて見るべきの

人参 上党に出づるもの、古上品となす。朝鮮之れに次ぐ。今や上党に出でず。しかして朝鮮亦少なし。その朝鮮より来るものあり。味甘し。それ真性にあらず。故に諸を仲景の謂ふところの心下痞癭に試むるに、効なきなり。用ふべからず。源順、順の和名抄に云ふ、人参、此れ久未乃伊と言ふと。蓋し本邦の俗、熊胆を謂ひて久未乃伊となす。しかし

人参 上党に出づるもの、古上品となす。朝鮮之れに次ぐ。今や上党に出でず。しかして朝鮮亦少なし。その朝鮮より来るものあり。味甘し。それ真性にあらず。故に諸を仲景の謂ふところの心下痞癭に試むるに、効なきなり。用ふべからず。源順、順の和名抄に云ふ、人参、此れ久未乃伊と言ふと。蓋し本邦の俗、熊胆を謂ひて久未乃伊となす。しかし

上党 秦の郡名で戦国時代の
韓の地。今の山西省冀東南部。
源順 平安中期の歌人で学者、
三十六歌仙の一人。
和名抄 倭名類聚鈔の略称で、
日本最古の漢和辞書。
熊胆 熊の胆を乾燥し、俗にくま
のいという。苦味甚し。

樹芸 草木を植えること。
桐君・雷公 ともに伝説の人
で、黄帝時代の薬の研究者。
五葉三極 葉が五枚で三つま
たである。
和州金峯 大和の国の金峯山。
桔梗 キキョウ科の多年草キ
キョウの根。

濁唾 汚い唾液。膿のまじっ
た痰。
腫脹 化膿性の腫物。
腥臭 なまぐさいにおい。
肺癰 肺膿瘍、肺壞疽など。
散 排膿散をさす。次行の白
散も桔梗白散の時。
腸癰 虫垂炎及びこれに類す
る病氣。

之れを治するの法…これを
治療するには病名の如何にか
かわらない。
漸きて白濁 桔梗に生のまま
のもの、といで白くしたも
のがあるが、白くしたものは
成分が異なり効力異なる。

小便の自利・不利 自利は出
すぎるほど出ること。不利は
出が少ないこと。ともに尤の
治すところ。
身煩疼 からだのわずらわし
い痛み。
痰飲 痰も飲も水のこと、
体内にたまって病氣の原因と
なる水を痰飲といひ、これに
広義のものと狭義のものとな
る。金匱要略の「痰飲咳嗽病
脈証并治」の篇に、「問曰、夫
飲有四、何謂也。師曰、有
痰飲、有支飲、有溢飲、有
水飲。問曰、四飲何以為異。
師曰、其人素盛今瘦水走腸
間、漑々有声。謂之痰飲。痰
飲」とあり、この痰飲は狭
義のものである。
失精 遺精。精液が病的にも
れること。精液の浪費するこ
と。
眩冒 頭に何か重いものをか
ぶっているようで、めまいが
すること。
天雄 二六七頁・補注「一年
を倒す」参照。
一身面目黃腫 一本に「黃」
を「洪」に作る。からだ中、

て亦人參と母す。則ちその味を以つて之れに名づく
るなり。是れに由つて之れを観るに、本邦、古昔、
用ひしところのものは、その味苦かりしも亦明らか
なり。今試みに朝鮮の苗を取つて、諸を本邦に樹芸
するに、その味も亦苦し。然れば則ちその苦きもの、
是れ人參の正しき味にして、桐君・雷公の同じく試
みしところなり。乃ち今余、本邦諸國に産するもの
を取つて之れを用ふるに、大いに心下痞鞭に効あり
その本邦諸國に産するものは、五葉三極、その形状
において、亦朝鮮に産するところと同じ。本邦諸國
に産するものは、和州金峯に出づるもの最もよし。
士氣を去つて、剉み用ふ。謹しんで苦を殺すことな
かれ。

桔梗 濁唾・腫脹を主治するなり。旁ら咽喉痛を
治す。

排膿湯は証関く。
桔梗白散証に曰く、濁唾・腥臭を出し、久久にし
て膿を吐す。

排膿湯及び散は、載せて金匱の腸癰部に在り。桔
梗湯及び白散にも亦肺癰の言あり。蓋し腸癰・肺癰
の論は、古より紛如たり。明弁あることなし。之れ
を極めんと欲するも能はざるなり。人の体中に見る
べからず。故に肺癰・腸癰なしと謂ふも妄なり。肺
癰・腸癰ありと謂ふも亦妄なり。凡そ臈脹を吐下す
る者は、その病胸に在り、しかして肺癰となす。そ
の病腹に在り、しかして腸癰となすもそれ亦可なり。
之れを治するの法、名の拘るところならず。その証
に隨ふ。是れを仲景となすなり。

品考
桔梗 処処に出づ。菓舖に賣ぐところのもの、漸
きて白濁なるは、その氣味を脱するなり。扱はざる
べからず。唯その土泥を去つて、その真性を殺さざ
る、是れを良となすなり。剉み用ふ。

尤 水を利用するを主る。故に能く小便の自利・不
利を治す。旁ら身煩疼・痰飲・失精・眩冒・下利・

二四二
桔梗湯証に曰く、濁唾・腥臭を出し、久久にして
膿を吐す。

排膿散は証関く。
以上四方、その桔梗を用ふる者、或は三両、或
は一兩、或は三分、或は二分。

右四方は皆仲景の方なり。しかして排膿湯は桔
梗を以つて君薬となすなり。その証を載せず。今
乃ちその桔梗を用ふる諸方を歴観するに、或は肺
癰、或は濁唾・腥臭、或は膿を吐するなり。しか
して桔梗を以つて君薬となすもの、名づけて排膿
となす。則ちその膿を排するや明らかなり。

互考

排膿湯の証関くと雖も、しかも桔梗湯之れを觀れ
ば、則ちその主治明らかなり。桔梗湯証に曰く、濁
唾・腥臭を出し、久久にして膿を吐すと。仲景曰く、
咽痛の者は甘草湯を与ふべし。差えざる者は桔梗湯
を与ふと。是れ乃ち甘草は、その毒の急迫を緩むる
なり。しかして濁唾・吐膿は甘草の主るところにあ
らず。故にその差えざる者は、乃ち桔梗を加ふるな
り。是れに由つて之れを観るに、腫脹を治すれば則

天雄散は証関く(説は互考の中に在り)。
以上一方、尤八兩。
桂枝附子去桂加朮湯証に曰く、小便自利。
麻黄加朮湯証に曰く、身煩疼。
越婢加朮湯証に曰く、一身面目黃腫、その脈沈、
小便不利。
附子湯は証具らざるなり(説は互考の中に在り)。
以上四方、尤皆四兩。
桂枝去桂加苓朮湯証に曰く、小便不利。
人參湯証に曰く、喜唾。
桂枝人參湯証に曰く、利下止まず。
茯苓沢瀉湯は証具らざるなり(説は類聚方に在り)。
茯苓飲証に曰く、心胸中に停痰・宿水あり、自ら
水を吐出す。
以上五方、尤皆三兩。
甘草附子湯証に曰く、小便不利。
真武湯証に曰く、小便不利・四肢沉重疼痛・自下
利。

顔までひどく浮腫する。停痰・宿水・停痰・宿水とも胃の中にたまった余分な水。

頭眩 めまい。

胃眩 眩冒に同じ。

本草綱目 明の李時珍の撰で、稿を改めること三回、三十年の歳月を費し、万曆十八年(五〇)に完成した。全五十二卷、附図二卷。わが邦に伝来したのは、慶長十二年(二六五)で、林道春が長崎で手に入れた。徳川家康に献上し、寛文十二年(二六五)にこれを翻刻して、東洞が本草に云々とするのは、主として、この書を指している。

夢交 夢で交接する。

尤附 尤と附子。

参を以つて参に代ふる 生姜の代りに人参を用いる。

上逆 のぼせ。

寒張 ここでは張仲景をさしている。

冥冥 くらいのこと。

方意 薬方の意味。この方はどんな病症のものに用いるかの意味。上逆のぼせ。下中 胃に薬力が通中

本専方 類証普濟本専方の略称で、宋の許叔微の著、全十卷。許叔微のこと。飲酒 胃拡張のように、胃に飲食物が停留して吐く病氣。胸膈 膈腹のいたみ。嗜雜 俗にいうむねやけ。酸水 すっぱい水。胃液。暑月 夏の暑い間は、からだの右半分にだけ汗が出て、左半分には汗が出ない。自ら措る 自分で考えてみる。游囊 飲辭に同じ。科曰 科はあな、白はうす。孟子尽心上に「流水之為物也、不盈科不行」とある。路以つて之れを決するなし 濁った水は底にたまって、流れて行く路がない。

脾土 脾は現代医学で云う脾ではなく、漢方の古典には胃のうしろらあって、胃のはたきを助ける臓器だとあり、このさいの胃は胃腸をさしている。脾は色が黄でからだの中央にあり、五行配当で土にあたるので、脾土とよんだものであるが、この脾土は脾胃の意である。

苓姜朮甘湯証に曰く、小便自利。苓桂朮甘湯証に曰く、心下痰飲あり。又云ふ、頭眩。

沢瀉湯証に曰く、その人、胃眩に苦しむ。

枳朮湯の証は具らざるなり(説は互考の中に在り)。茯苓戎塩湯証に曰く、小便不利。

以上七方、朮皆二兩。

五苓散証に曰く、小便不利。

以上一方、朮十八銖、しかして三兩の例。

右此の諸方を歴観するに、小便の変を論ぜざるなし。その他飲と曰ふ、痰と曰ふ、身煩疼と曰ふ、喜唾と曰ふ、胃眩と曰ふ、亦皆水の病なり。凡そ小便不利して、若の証を兼ねる者、朮を用ひて小便通ずれば、則ち諸証は乃ち治す。是れに由つて之れを観るに、朮の水を利するや明らかなり。

互考

天雄散は、金匱要略に載せて、桂枝加竜骨牡蠣湯条の後に在り。しかしてその証を載せず。しかして李時珍、本草綱目を作つて曰く、此れ仲景、男子の火痛を治する方なり。然れば則ち此の証あり、

しかして今或は脱するなり。男子は失精、女子は夢交、桂枝加竜骨牡蠣湯之れを主るの下に、当に天雄散亦之れを主ると云ふべきなりと。余を以つて之れを観るに、時珍の見、豈に朮附を以つて、失精・夢交を治すとさんや。此れ則ち本草を観て、以つて知るべきのみ。夫れ失精・夢交は水氣の変なり。故に朮を以つて主薬となすなり。

金匱要略の白朮附子湯は、即ち傷寒論中の桂枝附子去桂加朮湯にして、分量はその半を減するなり。蓋し朮、蒼白を別つは古にあらざるなり。故に今、方名を称するには傷寒論に従ふ。外台秘要の朮附湯も亦同方にして、分量は古にあらざるなり。皆従ふべからず。

附子湯は証具らざるなり。此の方の真武湯における、朮附を倍加して、参を以つて姜に代ふるものなり。しかして真武湯証に、小便不利、或は疼痛、或は下利あり。此の方は朮附を倍加す。則ち豈に若の証なかるべけんや。その証闕くや明らかなり。

らす。今その方相を考へ、桂枝去芍薬及麻黄附子細辛湯を合するなり。しかして桂枝去芍薬湯は頭痛・発熱・悪風、汗ある等の証を主る。しかして腹中に結実するものなし。麻黄附子細辛湯証に曰く、少陰病、発熱と。為則按するに、謂ふところの少陰病は、悪寒甚しきものなり。故に附子を用ふ。附子は悪寒を主るなり。二湯の証に依つて之れを推すに、心下堅大にして悪寒・発熱・上逆するものは、桂姜朮草黄辛附湯之れを主る。朮は水を利用するを主る。是を以つて、心下堅大にして、小便不利するものは、枳朮湯之れを主る。夫れ秦張の疾を治するや、その証に従つて因を取らず。因は想像なり。冥冥を以つて事を決す。秦張の取らざるところなり。故にその能く疾を治するなり。方中にその証在り。斯れその方意を知らずんば、則ち未だその証に中る能はざるなり。それその方意を知るは、薬能を知るに在り。能く薬能を知つて後、始めて与に方を言ふべきのみ。

弁誤

本専方に許叔微曰く、微、飲辭を患ふこと三十年、

左下より声あり、調劑、食膩じ、嗜雜、飲酒半杯即ち止む。十数日にして必ず酸水数升を嘔す。暑月は止右辺に汗あり、左辺絶えてなし。自ら措るに必ず游囊あらん。水の科白ありて、科に盈たずんば行かざるが如し。但清きものは行るべく、濁れるものは停滞し、路以つて之れを決するなし。故に積んで五六日に至れば、必ず嘔して去る。脾土は湿を惡む。しかして水は則ち流れ湿ふ。脾を燥して以つて湿を去るに若く莫し。土を燥くして以つて科白を填めんと。乃ち悉く諸薬を屏け、只蒼朮麻油大棗丸を以つて服す。三月にして疾除く。此れより常に服し、嘔せず痛まず、胸膈寛利し、飲啖故の如しと。為則按するに、仲景は朮を用ひて水を治す。しかして湿を去つて脾を補ふを云はず。許氏は則ち朮を以つて、湿を去つて脾を補ふとなす。しかしてその水を治するを云はず。何ぞその妄なるや。許氏の病は水の変、故に朮を得て能く治せしなり。人云ふ、許氏能くその湿痰を治すと。余之れに戯れて曰く、許自ら能くその病を治せしにあらす、しかして朮能く許の病を治せしなりと。何となれば、則ち許氏の説くところ

湿を悪む 脾胃に水がたまつて湿るのはよくない。土を築く。凹んで水のたまっているところに土を埋めて高くする。胸膈寛利 わねがゆったりとくつろぐ。飲液故の如し 飲食が病氣にならなかつた前と同じにされるようになった。瀝液 湿も痰もともに水。漢方で水毒とよんでいる。

信にして微あり まことがあつてたしかなよりどころがある。古方 古い時代の薬方。日本で徳川時代になって古方というのは、傷寒論を宗とする一派で、ここでいう古方とは異なる。本經 神農本草經。陶隱居 陶弘景のこと(二二八頁注参照)。白頭翁 キンボウゲ科の多年草オキナグサの根。熱利下重 熱性症状のある下痢で、大便が氣持よく出ずにしぼりばらである。心悸 動悸。

は、見るべからざるを以つて見るとなし、知るべからざるを以つて知るとなし。空理惟依る。古人は則ち然らず。水声ありて水を吐せば、則ち水となして之れを治す。是れ知る可くして之れを知り、見るべくして之れを見る。実事惟ならず。此れ、之れを見んするの道を謂ふなり。故に許氏の病ある者は、朮附を用ひて、以つてその水を逐へば、その効、神の如し。嗚呼、仲景の方たる、信にして微あり。是れに由つて之れを観るに、許の病の已えしは、許の効にあらずして、朮の功なり。

品考

朮 宗爽曰く、古方及び本經は、止単に朮と言ふ。しかして未だ蒼白を別けざるなり。陶隱居、兩種あるを言ふ。しかして後人、往往白朮を貴び、蒼朮を賤しむ。為則曰く、華産の兩種、その水を利するは、蒼は白に勝る。故に余は蒼朮を取るなり。本邦出づるところ、その品下にして功劣れり。判み用ふ。

*白頭翁 熱利下重を主治するなり。

考徴

白頭翁湯証に曰く、熱利下重。又曰く、下利、水を飲まんと欲す。

白頭翁加甘草阿膠湯証に曰く、下利。

以上二方、白頭翁皆三両。

夫れ仲景の白頭翁を用ふるや、特に熱利を治し、他に見るところなし。為則按ずるに、若し熱利、渴して心悸すれば、則ち白頭翁湯を用ふるなり。之れに加ふるに血証及び急迫の証あらば、則ち加甘草阿膠湯を用ふべし。

品考

白頭翁 和漢別なし。

藥徴卷之上終

藥徴卷之中目次

黄連	黄芩	柴胡	貝母
細辛	当帰	芍薬	芎藭
牡丹皮	茵陳蒿	艾	麻黄
地黄	葶藶	大戟	大戟
甘遂	附子	半夏	芫花
五味子	括囊実	葛根	防己

藥徴卷之中目次終

東洞吉益先生著

安芸 田中殖卿玄蕃

門人 石見 中村貞治子亭 同校

平安 加藤白圭子復

*黄連 心中の煩悸を主治するなり。旁ら心下痞、吐下・腹中痛を治す。

考徴

黄連阿膠湯証に曰く、心中煩して臥すを得ず。

以上二方、黄連四両。

黄連湯証に曰く、胸中熱あり、腹中痛み、嘔吐せんと欲す。

乾姜黄連黄芩人参湯証に曰く、吐下。

葛根黄連黄芩湯証に曰く、利遂に止まず。

白頭翁湯証に曰く、下利し水を飲まんと欲す。

以上四方、黄連皆三両。

大黄黄連瀉心湯証に曰く、心下痞、之れを按じて

胸中熱あり 現代医学で熱という場合は、体温の上昇を意味するが、ここでは熱感の意で、あつく感ずること。

黄連 キンボウゲ科の多年草 オウレンの根茎。心中の煩悸 胸の中が苦しく動悸がする。吐下 嘔吐と下痢。